

「TYPE R」が持つ圧倒的な走りの喜びを、 もっと多くの方々に届けたい、知っていただきたい

入社以来、車両運動性能の現場で、歴代「TYPE R」の開発を目の当たりにしながら、私自身も複数のモデルの開発に携わってきました。NSX-Rに始まるこれらのモデルは、国内の出力自主規制や、ベースとなるモデルのハードウェア構成といった「枠」の中でいかにして運動性能を高めるか?という独自の進化を遂げてきたクルマだったと言えます。

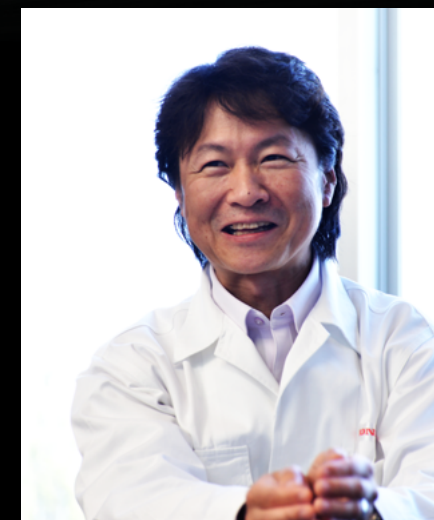
この、「TYPE R」が持つ圧倒的なドライビングプレジャーを、限られた人だけでなく、もっと多くの方々に届けたい。知っていただきたい。そのためには、「枠」を飛び越えた、より高い目標を描く必要があると考えました。そこで、かつて自らに課してきたあらゆる制約を取り払い、TYPE R史上最速であるのはもちろんのこと、かつてないグランドツアラー性能や日常での楽しさまで備えた「新世代TYPE R」の姿を思い描いたのです。

ただ速いだけのクルマではなく、あらゆる環境が待ち構える公道を走るクルマとして、基本性能をしっかりと磨くこと。その上でス

ポーツカーとして卓越したパフォーマンスを磨くこと。ステアリングを握る人それぞれが、意のままに操る喜びを知り、満ち溢れた気持ちで駆け抜けることができること——。ドライバーが絶対の自信をもって操れる操縦感覚を追求し、どこまでも走り続けていたいと思えるクルマを目指しました。

理想を高く掲げたがゆえに困難も伴いましたが、たゆまぬ技術開発とその進化の上で、徹底的に実路を走り込むことでフィードバックを重ね、一歩ずつ実現に向け近づいていきました。現場に赴き、現物と触れ合いながら、現実と向き合うという過程は、まさにHondaのフィロソフィーである「三現主義」の体現。このプロセスこそが、シビック TYPE Rの運動性能を「新時代」のレベルへと高める原動力になりました。

これまでの「TYPE R」をご存知の方にも、新たに「TYPE R」に触れる方にも、自信を持っておすすめできる一台が完成したと確信しています。ぜひお楽しみください。



シビック TYPE R 開発責任者

柿沼 秀樹

(株)本田技術研究所 四輪R&Dセンター 主任研究員

1991年、(株)本田技術研究所入社。サスペンション性能の研究開発部門に配属後、運動性能に関わる車両ディメンションやサスペンションジオメトリーなどの研究開発を手掛ける。1999年にはS2000、2001年にはシビック TYPE R、NSXなど、スポーツモデルを中心にサスペンション性能開発を担当。2012年から実車性能開発部門のリーダーを務め、その経験から磨き上げた技術・感性を活かし、今回シビック TYPE R 開発責任者を務める。